

保 育

思考力の芽生えとことばを育む環境の在り方

—遊びの中で感じ、考え、試しながら思いをあらわす3歳児の実践を通して—

吉 原 智 恵 美

1. はじめに

近年の幼児を取り巻く社会環境の変化の中で、コミュニケーション能力の不足、直接体験の不足、学びに対する意欲や関心の低下といった課題がある。¹⁾それに伴って、平成20年の幼稚園教育要領の改訂において、「環境」の「内容の取扱い」に「特に、他の幼児の考えなどにふれ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること」²⁾という文言が付け加わったり、「言葉」の「内容」に「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する」³⁾と表記されたことなどからも多様な体験やことばでの伝え合いなどが強調されている。幼児が人の話を聞いたり、自分の経験や考えを話したりしながら伝え合う喜びを味わうためには、身近な自然や様々なものや人との出会いから心を揺さぶられる体験を重ねることが必要である。

6月の初めの頃である。砂場の横にある手洗い場で水を流しているA男がいた。何度も蛇口を開け閉めして水を流したり止めたりを繰り返している。よく見ると、手洗い場下のマンホールのふたの隙間から水が出ているのをじっと見ている。「なんで、ここは水が止まっているのかなー?」「なんで?」とつぶやいている。教師が「止めたらどうなるんだろうね」と言葉をかけると、「わかった!(蛇口を)止めたら・・・ここも止まってしまう」と言いながら何度も水を出したり止めたりを繰り返し、マンホールの隙間を覗き込んだり、指で水が出てくるところを何度も触って確かめていた。水が流れていく様子を追いかけて砂場

に行き着くと、「ここも流れている」「(水が)動いているよ」「あふれてドンドン」と思ったことを教師に喜んで伝え、片付けの時間までずっと流れる水を見たり、触れたりして過ごし、「明日もしょうと!」と満足した様子だった。大人にとっては、手洗い場の水が配水管を伝って流れ、たまたま排水溝に隙間ができていたために水があふれていただけたことであるが、A男にとっては、自分が見つけ、面白さを感じ、いろいろ考えたとても価値ある出来事であった。

何をしたかが大切なのではなく、自分が興味をもったことにじっくりとかかわることで、様々なことを感じ、考え、試すことができることが幼児の思考力の芽生えを育む多様な体験といえるだろう。そして、そこで用いられることばにはコミュニケーションとしてだけでなく、考えを整理する手助けをするといった思考の芽生えを培うための手段としての機能もある。幼児は、心動かされる体験の中で身近なものへの興味や関心、疑問を抱き、好奇心や探究心、思考力が育まれていくのであり、思考する手段としてのことばも芽生えていくものと考えられる。

以上のことをふまえながら、本研究ではテーマを設定し、実践の中で体験から育まれる思考力とことばの関係に視点をあてて環境や教師の在り方について考察していきたい。

2. 研究の構想

(1) めざす子どもの姿

3歳児について、森上(1986)が「“探索時代”といわれるほど、自分の周りに目を向ける時期で

あり、知的好奇心のかたまりで、知りたがりや、試したがりやである」⁴⁾と述べているように、身の周りにあるものや新しく出会うものなどに関心をもって見て同じことをしたり、自分からかかわったりしながらどんどんと世界が広がっていく。語彙の獲得においても急激に増えていく時期でもある。子どもたちが自分の興味・関心のあることに個々にじっくり取り組む中でため込んだ、自分の行動や経験を通して感じたり考えたりした様々なことを意識したり、ことばを用いて整理したりすることで、より感情や思考を豊かにしていくことができる。そこで、本研究においてめざす子どもの姿を次のように設定した。

自分なりに感じたり、考えたりしたことを、喜んでことばにあらわしたりやってみようとしていたりする子ども

(2) 具体的な方策

めざす子どもの姿に向けて、喜んでことばで伝えたり、思いをあらわすためのことばにふれたり広げたりするための具体的な方策として次のように考える。

- ・心を動かされる体験ができる環境や教師のかかわり
- ・興味や関心をもったことを試したりじっくり取り組んだりできる環境や教師のかかわり
- ・子どもの思いや気づきを広げる環境や教師のかかわり
- ・友だちのいろいろな思いや考えにふれる環境や教師のかかわり

3. 実践事例 (3歳児)

実践例1「水たまりに石を落としてみると・・・」

5月24日

雨上がりの園庭に水たまりができています。特にでこぼこした地面には水がたくさん溜まっていた。B女は園庭で見つけた石を水たまりで洗っていた。「この中に石を入れたらポチュン ポチュンってなるよ」「入れてみようか？ほら…ポチュン！」と水たまりに石を入れた。教師は「本当だね ポ

チュンだね」と同じようにやってみた。すると側にいたC女も石を入れて「ポチュン！」と真似をする。C女は立って石を高い位置に持つと「見て見て！」と石を落してみる。「ポチュン!」さっきとは音が違うことに気づいたB女は大きい石を見つけ「いいこと考えた!」「見て!バチャって言うよ」「だって大きいから」「ボがつくよ!」と言って大きな石を高い場所から落とす。水しぶきはね、「ちった!」「ボがついた」と言う。教師が、「この石だったらどうかな?」「低いところからでしょうか、高いところからでしょうか?」と聞くと、「高いところ!やってみて!」と言うので石を落してみると大きく水がはねた。それを見てB女は「ポチャンじゃ!ボ!」と喜ぶ。石を探して見つけると、「やってみる!」張り切っている。「その石は大きい?小さい?」と聞くと「大きい」「先生、いくよ!高いところからやってみよう」「せーの!」と石を落してみる。そしてその音を聞いて「ポチャンじゃ ボ!」「ボだった!」と興奮したように大きな声で言って喜んだ。



図1 水たまりに石を入れてみよう

【考察】

B女は水たまりに石を入れた時の音に面白さを感じ、気づきを教師に伝えたいと考えた。教師はその思いを大切に受け止め、一緒にやってみたり、同じことばを繰り返したり、新たな考えを引き出すことばを投げかけたりすることで、B女は「〇〇したら～なる」という自分なりの発見を意識することができた。また、C女がB女とは違ったやり方で高いところから石を落とすことを見せたこと

は、「高さが違うと音が違う」という新たな気づきにつながった。そのことでさらに思考が刺激され、自分なりにいろいろ試し、何度も繰り返しているうちに、石の大きさや、石を投げ入れる高さによって水のはね具合や音の違いにB女は気づいていく。「ポチャンじゃ！ポ！」「ポだった！」と何度も繰り返し、確認して喜んで伝える姿からB女の素直な感動がうかがえ、自分なりに考えたり、やってみることの喜びを感じていることが見て取れる。

実践例2「雨の音がする」7月1日

雨の日にD男がカップを手に持ち雨粒を集めたいと探していた。「ない」「集まらん」と言ってテラスを行ったり来たりしている。教師は「おもしろいね」「どこがいいのかなー？」と声をかけ、一緒に探すことにした。「あそこがいい！」とテラスの屋根が途切れた場所を指し、手を伸ばして雨がたくさん降り注いでいる木の下にカップを差し出した。周りで見っていた子どもたちも手を伸ばして雨を受け止めているので教師はカップを用意し、「やってみよう」と木の下にカップを置く。雨がカップにたまってくると「できた」「バッチン バッチン（って音がした）」「先生 見つけたよ」「雨のお水」と感じたことを思い思いにことばにする。その時、E男の手が偶然枝の葉にあたり、枝がはじかれ雨粒が飛び散った。その瞬間、驚いたようにぱっと教師のほうを見て驚いた教師と目が合うと、笑顔になった。そして「見てて！」と言って枝の葉をたたいてはじいて「ピシャン」と言って笑顔を見せた。何度も繰り返しやって見せ、雨粒が飛び散るのを喜んで見ていた。

【考察】

この事例は雨の日の何気ない一場面である。雨の水をカップに集めたいというD児の思いを教師が大切に受け止め、一緒に探すことで周りの子どもたちも興味をもち遊びが広がった。雨がたくさん集まる場所を子どもたちは見て、考えて容器を置いていた。その際、雨音を聞きながら子どもた

ちは思い思いに感じたことをことばであらわしている。このことから子どもが五感を通して感じ、心を動かされたとき、その思いが自然とことばにあらわれたり、自分を含め誰かに伝えたいという思いが生じることがわかる。

E男は、枝がはじかれて水滴が飛び散った時、パッと教師のほうを見て笑顔を見せた。その瞬間、E男の心は激しく揺さぶられたのであり、一緒にいた教師とその驚きや感動を共有することで、E男にとってとても価値ある出来事になった。このように、日常の何気ない場面において、子どもが心動かされる出会いを見逃さないように教師がかかわることが、科学的な見方や考え方の芽生えにつながっていくと考える。



図2 雨のお水がいっぱい

実践例3「泥んこ遊び」9月

〈エピソード①「かたまってる！」9月15日〉

前日に園庭で土と水を混ぜて泥んこ遊びをし、こねたり丸めたり伸ばしたりしてプラスチックの段ボール板の上に置き、そのまま園庭の机の上に置いていた。教師は「どうなってるかな？」と子どもたちに投げかけ、一緒に見に行ってみると泥がカチカチに固くなっていた。「かたまってるよ」「かたまつとるじゃん！」とその変化に驚いている。泥を触って驚き、「さわって！」「ここもさわって！」と周りにも言っている。A男が「包丁で切ったら切れるよ」と言うので「切ってみたい」と包丁を持ってきて切るF女。丸い形の泥に切れ目がついたのを見て、「ハンバーグ！」「メロンパン！」と見立てたり「ジャク ジャク ジャク」

と切る際の音を口に出して言ったりして切った土の塊を触り、「かたまってる」「かたまってるじゃん」と何度もつぶやいているG女。A男は「固いなー」と言って包丁を何度も動かして「ゴリゴリ」と切っている。そこへF男が「どうなったた?」とやってくる。泥の塊を手でつぶして「うわっ!すごい」と声を上げる。泥を触って乾いていることに気づき、「水がなくなるとるじゃん」と言うI男。教師が「どうしてだと思っ?」と聞くと、「誰かが飲み込んだんよ」「太陽が飲み込んだんよ」というA男。板の上の硬くなった泥をいくつも包丁で切り「かたーい!」「かたいねー」「これ石みたいに見える?石みたいに見えるけど」と教師に感じたことを伝える。「これオムライスを作ったんだよ」「昨日はやわらかかったのに今日は硬いね」と言うE男に「どうしてだと思っ?」と聞くと、「待っていると硬くなっていくの」「寝て起きたら硬くなってるんだよ」と言い、「切るから見て」「切るとちぎれるんよ」E男はすでに切ったある小片をどんどん小さく切り、「これはチョコレートケーキよ」と見てイメージしたものに見立てている。板の上に粉々になった泥を「砂を落とすんよ」と言って手ではらっているJ女に「砂になったの?」と聞くと、E男が「砂になっちゃったね」と言葉を返した。F女は「見ようて われるけー」と言って手で泥の塊を割って見せ、「こうなっちゃう」と指でつぶし「おもしろいね」と言って砂状になった土をカップに集めていた。



図3 包丁で切れるよ

【考察】

前日にはやわらかかった泥が固くなっていたことへの驚きと感動を子どもたちは思い思いにことばに表していた。教師は、泥が乾くとどうなるかを、子どもたちに実感してもらいたいと考え、前日活動したままの場所にそのまま置いておいた。子どもたちは何度も触って確かめたり、包丁で切ってみようとしたりと、柔らかかった泥が硬くなったという変化が生じたことで、新たに好奇心や探究心が働いていることがわかる。固まっていることを「さわって!」と教師や周りの友だちに何度も伝え、触って確かめることで、乾くと固まる、泥は固くなる、ということを実感として体験する場ともなった。

また、教師は疑問や気づきをつぶやくG男やE男に、「どうしてだと思っ?」と問いかけた。そのことで、「太陽が飲み込んだんだよ」「寝て起きたら硬くなるんだよ」と、自分の体験や知識からその特徴にあったことを自分なりなことばにしてあらし伝えようとするのが見てとれ、思考とことばの芽生えを刺激することにつながったと考える。

〈エピソード②「泥団子を作って転がしてみよう」 9月16日〉

子どもたちと園庭のいろいろな場所で集めた土を入れたタライと水を入れたジョウロを用意し、築山の近くに置く。「触っていい?」と土を触って感触を味わい、自分たちで水を少しずつ入れたりと、たくさん水を入れ過ぎると土を足したりしながら泥だんごを作っていた。泥団子ができると、「触って!」「かたいよ」「見て!こんなに硬い」「ほら! 重たい」「ちょっとさわってみて」と言って教師にできた泥団子を見せに来る。「かたーく かたーく」と言って両手で強く握っているC女。丸くなると、築山に上り、サラ粉をかけている。I男は「片栗粉よ」と言って築山の上でサラ粉を指でつまんでは何度も黙々と丸めた泥団子にかけている。築山の頂上には粉ふるいでサラ粉をかける片栗粉屋さんがある。H男が築山の上から

作った泥団子を転がすと、泥団子は斜面を転がり途中で壊れた。教師も「おもしろそう」とやってみると、周りの子どもたちもみんな転がし始めた。築山の斜面に座り、「1, 2, 3, 4, 5!」と掛け声をかけて転がすK女。転がって割れると「やったー!」と喜んでいる。B女は「先生 さわって!かたくしたんよ」「砂をいっぱいかけたから」「私のは壊れんのんよ」と言って斜面の下のほうから転がして見せ、壊れないことを得意そうに話す。L男とM女は斜面に二人で並ぶと、「割れたほうが勝ちなの」と言って同時に転がして競争して楽しんでいる。G女は手のひらで泥団子をたたいて見せ、「パーでしたら壊れん」と発見したことを教師にやって見せる。



図4 泥団子を転がしてみるよ

〈エピソード③「ここにもサラ粉あるんだよ」〉

泥団子を作っては築山の上から転がし、壊れるとまた作って転がすことを繰り返しているD男。「片栗粉つけなくっちゃ」と言ってサラ粉をかけて両手で握っている。「ここにもあるんよ」と言って、築山の斜面の裏側のトンネルのところに行くと、教師に声をかける。見るとサラ粉がたくさんあり、N男と泥だんごにサラ粉をかけている。「大きくなったよ」と泥団子を見せ、教師が「どうやったん?」と聞くと、「えーっとね 砂をいっぱい入れてねいっぱいね あっち(泥の入ったタイヤを指さし)のやつに入れてね いっぱい砂を入れて大きくなるの」「いっぱい砂を入れたの?」「砂入れた」「その乾いたの?」「乾いたの」と教師

とやり取りしながらもその間ずっと泥団子にサラ粉をかけては両手でギュッと握ったりなでたりしている。

「硬くなってきた」とD男が言うと、N男は「硬くなってきた」「あーっ 硬くなってきたよ これ」と返す。教師が「ちょっと触ってもいい?」と聞くと、すっと右手に泥団子をもって差し出し、自分も左手の人差し指でそっと押し試みて、「見て 硬いでしょう? ボールみたいよ」と言ってまた砂をかけている。教師が「ボールみたいだね」と返すと、N男が「ボールみたい!」と喜ぶ。

【考察】

エピソード②と③では教師も一緒になってやってみたり、子どもの発見や気づきにことばで投げかけたりすることがきっかけとなって、周りの子どもたちの好奇心や意欲をかき立て、それぞれが感じたことを考えたりやってみたりすることにつながったことが見て取れる。B女は、周りの友だちが泥団子を斜面の上から転がすと途中で壊れてしまう様子をずっと見ていて、泥団子は転がっている途中から壊れていたことに気づいた。そこから、B女は転がる距離が短ければ壊れないののではないか、斜面の低いところからなら転がしても壊れないだろうという自分なりに考えることにつながったのではないかと考えられる。友だちと同じ場にいることで、周りのしていることや考えにふれることになり、B女の考えも広がったと考える。自分なりの発見は喜びを生じさせ、自分なりに確かめたり、教師にその発見を伝えたりする意欲になったと考える。

D男は何度も泥団子を作っては転がして黙々と泥団子を作っていた。教師や友だちとのやり取りの中で、自分なりのことばで考えを伝えていることから、教師の問いかけが自分が無意識に考え行っていた行為を振り返りながら意識して考えるきっかけになったことがわかる。教師や友だちにことばで伝えることで、自分なりに砂や泥の性質や泥団子の仕組みについて整理して考え、その発見を相手に伝えようとする喜びにつながったと考

える。

〈エピソード④「水たまりで泥団子づくり」9月21日〉

雨上がりの園庭で水たまりを見つけ、「先生 水たまりがあるよ ほら！」と靴で入ってみたり触ってみたりしているI男。教師が水たまりの土を集めて「ほら お団子ができた！」と見せると、「見て お団子！」とすぐ同じようにやってみるO女。Q女が「なにしょうるん？」とやってくると、「お団子よ Oちゃん お団子作ってるの」「お団子いかがですか？」「ギュッと絞ればいいんよ」「しぼるんよ」「絞ると硬くなるの」と作って見せる。E男が「できた！団子」と作った泥団子を水たまりの中に入れる。「水に入れたらね ほら・・・」「水につかったら沈むんだよ」「ほら何にもないでしょ」と作った泥団子が水に溶ける様子に気づき、嬉しそうに話す。それを見て、水たまりの土を手指でひっかいて取って集めては土を水たまりに戻すことを繰り返すJ女。E男は次に「こう向けて 手を離す」と立った姿勢で作った泥団子を水たまりの上から落とし、「手を離したら沈むんよ」とやって見せる。「転がしたら割れるからね」と言いながら水たまりの土を集めているI男。

D男は水たまりの土で泥団子を作ると、築山の裏側のトンネルの場所に行き、泥団子に砂をかける。しかし、「(土)が一緒じゃない」「どうして？」「雨が降ったけー」と言いながら少し湿り気のある土をかける。泥団子を地面に置くと、周りの土を集めて押して固めている。「前の土はさわってどうだった？」「やわらかかった」「今日の土はどう？」「硬い」「なんでだろうね？」「雨かねー 雨が降ったら硬くなるんよ」そう言いながら、土を集めてギュッギュッと両手で握って固め、指でトントンたたいて確かめている。「硬くなった」「やってみよう」と言うと、築山に上がり、泥団子を転がしてみる。割れないのを見て「まだある」と言って、また転がしてみる。2回転がしても割れない。「まだある 割れない」と3回

繰り返す。「まだまだ できる」と4回目を転がすと割れてしまった。「もう1回作る」とまた水たまりのところへ走って行った。



図5 泥団子を水たまりの中へ

【考察】

エピソード④では、①②③で経験したことが生かされ、水たまりで泥団子を作る過程で、感じたり考えたりしたことを「〇〇だから△△なんだよね」と一緒にいる友だちと自分の考えを伝え合ったり、確認し合ったりしていることがことばからうかがえ、友だちと伝え合うことで自分の経験したことを振り返ったり、新たな考えを生じさせたりして思考が広がりことばも増えていくことが分かった。

実践例3「小麦粉粘土」11月4日、5日

小麦粉粘土を作って遊ぶ際、子どもたちは帽子のお面をつけてパン屋さんになっているいろいろな形のパンを作って遊ぶことを楽しめるようにした。4人のグループになり、ボールやタライに小麦粉を入れて各グループに配ると、子どもたちは小麦粉を両手で触りかきまぜたり、握ったり、手に粉をまぶしたり、匂ってみたり、口に入れたりするなど、喜んで触れ、その感触を味わっていた。

同じグループの友だちと一緒に喜んで小麦粉に触っている。教師が「さわるとどんな感じがする？」と聞くと、「気持ちいい」「いい匂いがする」「なんかホワホワする」と感じたことを話す。

粉だけだと固まらないことに気づき、「水がいる！水入れんと！」とB女が言うと、周りの子も



図6 水を入れると手にくっつくね

「水!」「水がいる!」というので、ペットボトルに水を適量入れて渡す。

水と小麦粉が混ざると、「うわーっ!」「こんなもの!」と両手でドロドロ状になったものをすくっては伸ばし、何度も「うわー ああー」「おばけだぞー」とその手を教師や近くにいる友だちと喜んで見せ合うE男。P男はドロドロ状態の小麦粉を両手で握り、「うわーっ」と言いながら両手を離し、小麦粉が伸びてちぎれると「パタッ」と言ってやってみることを繰り返す。小麦粉が伸びる感触や様子を見て楽しんでいる。みんなですべて混ぜたりこねたりしていくうちに、「なんか固まってきた」「トロトロだー」「のびるー」「くっつく!」と粘土状になった小麦粉を集めてそれぞれ丸めたり固めたりしている。P男は団子状に丸めたものを両手で包み、「こうやってやったらーできるんだよ」とずっと振っている。教師が「振ったらどうなるの?」と聞くと、「先生 見よーてよ」とずっと振りながら「ジャジャーン!丸くなりました」と両手を開いて見せた。

次の日、3色(桃・黄・緑)の小麦粉粘土と大きな粘土板を出すと、「この前のを作ろう」とQ男。「もみもみもみもみ・・・」と粘土を板の上で上下にこねている。細く伸ばして人差し指に巻きつけて動かし、「おばけー」「先生もやってみー」と言うと、R女が「かわいいおばけー」と真似をする。教師も「おばけだぞー」と同じようにやってみると、K女、O女も「おばけだぞー」と同じようにやってみる。G女は「見ようてよ」と言うと、丸くした粘土を転がして見せ、「壊れん」「す

ごいでしょ」と言う。次に「先生 見ててよ」と丸くした粘土を上から落として見せ、「見て 壊れん」と得意そうに見せる。Q男は、「こうやったらねー」と言って右手で粘土をつかみ「落ちるでしょうか?」と手を開いて見せる。粘土が手にくっついてなかなか落ちない。しばらくすると、ゆっくりと手から粘土が離れ、「落ちた!」「手にくっついてたね」と言葉をかけると、嬉しそうに「もう1回しましょう もう1回いきましょう」と手のひらにくっつけ、「先生 見ようてよ 落ちるでしょうか?」と繰り返す。近くにいたO女、K女も「先生 パーにしても落ちんよ」「落ちん」と同じようにやって見せる。「なんで落ちんのかね?」と聞くと「えーっ?!なんでじゃろう」と二人は顔を見合わせる。Q男は「落ちるでしょうか ワン ツースリー フォー パン!」と今度はもう片方の手で粘土を受け止め、「うーん 残念」と言って繰り返し楽しんでた。P男は、粘土を両手に持ってぐるぐる回しながら「糸まきまき 糸まきまき ひーて ひーて とんとんとん」と歌を歌いながらリズムに合わせて粘土を左右に引っ張り、「長くなった!」と喜ぶ。「もっと速くして!」と言われ、「もみもみもみもみ 混ぜて 混ぜて」と言いながらもっと速く両手でぐるぐる回す。



図6 落ちるでしょうか?

【考察】

Q男は何度も「落ちるでしょうか?」という問いかけを繰り返している。小麦粉粘土を作る経験

を通して、粘土は手にくっつくがしばらくすると離れる、という予測をQ男はたて、自分の経験からそうなることも認識している。何度も繰り返すことで、教師や友だちもそれは分かっているのにもかかわらず、何度も問いかけている。このことから、Q男が自分なりに実感し、発見した驚きや感動を周りの教師や友だちに知らせたい、伝えたい、聞いてほしいという強い思いが読み取れる。同じように繰り返しながらも、粘土を手で受けとめたり、落ちるまでの数を数えてみたり、新たなことばが付け加わっていくなど、自分が考えたこと、気づいたことを自分以外の相手を通してあらためて再確認しながら、新たに思考を働かせ、試していることがわかった。

4. おわりに

子どもたちは、日常の何気ない場面で様々なものや出来事にふれ、時には無意識に多くのことを感じたり考えたりしている。自分以外の人やもの存在に気づき始め、周りの環境に大きく左右される3歳児にとっては、見るもの、聞くものが自分にとっては初めての世界であり不安を感じる反面、大きな好奇心をもってかかわろうとする。そこには信頼できる教師の存在が大きい。教師に支えられながら、子どもたちは感じ、考えたことを思い思いにあらわしたり、自信をもって試したりすることに喜びを感じることができるのである。実践の中で、子どもたちは、心を動かされたものや興味・関心をもったものにじっくりとかかわる体験を通して、感動や驚きを感じたり、疑問や不思議さを考えたり、自分なりの発見や気づきを実感したりしていた。そのことは、教師や周りの友だちに喜んで伝えようとする気もちを生じさせると同時に、教師が丁寧に子どもの思いをくみ取ることで、子どもたちが自分の思いを表すためのことばも育まれていくことがわかった。

特に、自然事象や水、土、泥、といった素材は子どもたちにより身近にあり、直接触れることができ、五感をくすぐるものであり、飽きさせない

魅力的な対象である。繰り返し触れたり、感じたり、考えたりする中で、子どもたちは物の仕組みを実感し、意識しながら、科学的にもものを見る目を養っているものと考えられる。そのためには、子どもたちが興味のあることにじっくりかかわり、あれこれと考える時間が保障されている環境であることが大切である。

しかし、遊びや生活の中で子どもが夢中になって取り組んでいることを、教師自身が妨げてしまっていないだろうか。例えば、冒頭で述べたA男の行動に教師が価値を見いだせなかったら、「水がもったいない」「時間だから」と活動を制止してしまうことになったかもしれない。そうすると、A男の気づきや思考の芽生えはそこで断ち切られてしまったことになる。子どもの興味や心を動かされる場面は個々で異なり多種多様である。子どもの何気ない行動や言葉にじっくりと耳と心を傾け、今何に心を動かされているのか、興味をもっているのか、心の動きや内面に目を向け、子どもの思いに沿いながら教師も一緒になって体験を共有することが大切であり、そのようにかかわることができる教師でありたいと思う。

<参考・引用文献>

- 1) 中央教育審議会：「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(答申)」，2005.
- 2) 文部科学省：「幼稚園教育要領解説」，p. 133，2008，フレーベル館.
- 3) 前掲書 2)，p. 141.
- 4) 森上史朗：「3歳児の世界」，森上史朗編，p. 15，p. 146，1986，世界文化社.